

メッセージアウトライン

ローマ11：13～24「誇ってはならない」

[13-14]「そこで、異邦人の方々に言いますが、私は異邦人の使徒ですから、自分の務めを重んじています。そして、それによって何とか私の同国人にねたみを引き起こさせて、その中の幾人でも救おうと願っているのです」

福音が異邦人になしたことを見て、イスラエル人たちも心動かされて、それを求めるようになるというのがパウロの希望であり、願いであり、祈りなのである。

[15]イスラエル民族が神に捨てられることによって、福音は広く異邦人世界に伝えられ、それによって神と世界の和解が実現した。それならば、イスラエルが再び受け入れられ、救われる時はどんなに素晴らしいことか。「死者の中から生き返ること」とは神の前に捨てられ、死人となっていたイスラエルが悔い改めて、再び神によって生かされた者となるという意味。歴史はその時に向かって刻々と近づいていく。

[16]「初物が聖ければ、粉の全部が聖いのです。根が聖ければ、枝も聖いのです」

これは民数記15:18以下からの引用。麦粉でパンを作る場合、最初のひとかたまりを取ってそれでパンを作り、それをまず主にささげた。そして、それが聖められることによって残りの全部も聖いものとされた。「初物」とはここではイスラエル民族の先祖であるアブラハム、イサク、ヤコブといった族長たちのこと。その族長たちが神の前に聖いとされているので、イスラエル民族も聖いとされている。同様に「根」は族長たち。「枝」はその子孫をあらわしている。これらのたとえばイスラエル民族が神によって特別に選ばれ、聖められた民であることを示している。

[17-18]「枝の中のあるもの」とは不信仰なイスラエル人、「野生種のオリーブ」とは異邦人のこと。彼らはイスラエル民族の霊的祝福に接ぎ木された。「根」とは族長たち、「豊かな養分をともに受けている」とはその契約の祝福にあずかることを意味している。それゆえ異邦人キリスト者は不信仰のゆえに捨てられたイスラエル民族に対して決して誇ってはならない。枝が根をささえているのではなく、根が枝をささえているのである。

[19-21]ここでは異邦人キリスト者の救われているという自負から来る高慢にたいしての警告が述べられている。人は自分の功績や力によってではなく信仰によって救われる。それゆえ自分が何か偉いものであるかのように高ぶってはならない。神が台木の枝であるイスラエル民族さえ惜しまれなかつたとすれば、いざとなれば接ぎ木された異邦人キリスト者を惜しまれないとしても当然である。神は恐れなければならないお方である。

[22-24]異邦人キリスト者も神のいつくしみの中にとどまっていなければ切り落とされる。イスラエル民族も不信仰を続けなければまたつぎ合わされ救われる。神は彼らを再びつぎ合わせることがおできになる。神はそのようになす主権、力を持っておられる。

野生種であるオリーブ、異邦人がつがれ救われることができるならば、もともとの栽培種の良いオリーブ、イスラエル民族はもっとたやすくもとの台木につがれ救われるはずである。異邦人キリスト者はこのことをよく理解して、高慢になることなく、神を恐れ、謙遜と感謝をもって従い、パウロのように何とか一人でも多くの人々が救いに導かれるように願いつつ、福音を伝え、信仰の歩みを進めなければならない。